

1968年10月1日、いろいろな事由もあって前会社を退職した7人で大垣精工を立ち上げた。私以外は全員が技術者で私が社長として営業を担当した。設立当時は金型生産メーカーが必要とされていた。当社も順調に発展することができた。昨年は私にとって記念すべき年だった。昭和100年、太平洋戦争終結80年と当社設立57年を迎えた。昭和20年8月の終戦当時は小学1年生で、広島・長崎へ原爆投下のニュースも父親から知らされたと記憶している。金型の視点では日本は



金型企業の歴史

大垣精工会長 上田勝弘

少量生産に対し、米国は自動車・航空機・弾薬の大量生産という格差があった。その元は金型技術の格差であった。しかし、敗戦後、日本の陸軍海軍の兵器の生産に携わっていた工場の出身技能工や技術者が東京、大阪、名古屋などで金型メーカーとして出発した。大量生産が可能となった。国内では車や家電製品の普及期を迎え、会社が林立する。日本製の車や家電製品の品質が高く評価されるのは、金型の精度に基因している。年間金型生産額は1位が中国で4兆円、2位が米国で2兆2千億円、3位が日本1兆4千億円、4位が韓国7千億円、5位がドイツで6300億円。世界23カ国で約10兆円が生産されている。品質は日本1位、ドイツ2位だが、近年の精度の高い工作機械の台頭で金型の技術格差はなくなりつつあり、厳しい価格競争にさらされているのが現実である。20年前に日本で1万2千社あった金型企業も約6千社まで減少した。雇用人数も減少を続け、厳しい冬の時代に突入している。ものづくり日本に大きな課題を投げかけている。